

メッセージアウトライン ヨシュア記2:1~24 「エリコの偵察」

イスラエルを出エジプト以来導いてきた指導者モーセは約束のカナンの地に入る前に死に、彼の後を継いで、彼の従者であったヨシュアが神の命によって指導者になった。→申命記31:7~8、ヨシュア記1:1~9

主が繰り返し彼に語られたのは、「強くあれ。雄々しくあれ、恐れてはならない。おののいてはならない。あなたが行くところどこでも、あなたの神、主があなたとともにおられるのだから」(ヨシュア1:9他)であった。荒野の四十年でさまざまな経験を積んできたとはいえ、これから直面する戦いや困難を思う時、ヨシュアの心には恐れや躊躇の思いがあったのではないだろうか。それゆえ、主なる神は、これからのすべき大事業のためにヨシュアを繰り返し励まされるのである。

神の約束の中ではすでに与えられている(1:3)と言われる領土も実際にはイスラエル人が一步一步その足の裏で踏んで占領していくべきものであった。イスラエルは神の約束をしっかりと握って、信仰をもってこれから、その地を自分たちのものとしていかなければならないのである。

指導者が臆病であったり、消極的、後ろ向きであってはとてもこの大事業を成し遂げることはできない。それゆえ、主は「強くあれ。雄々しくあれ。…」と繰り返し励まされ、何よりも主がともにいてくださるとの約束が与えられているのである。

私たちも信仰生活において、さまざまな出来事に直面して臆病になったりすることがあるが、主がともにいてくださるならば、強く雄々しくあることができ、恐れを乗り越えて前進することができることを覚えなければならない。

[2:1]「ヌンの子ヨシュアは、シティムから、ひそかに、二人の者を偵察として遣わして言った。『さあ、あの地とエリコを見て来なさい』彼らは行って、ラハブという名の遊女の家に入り、そこに泊まった」

「シティム」…ヨルダン川の東約12キロメートルのモアブにある地。「エリコ」…死海の北約15キロメートル、ヨルダン川から約10キロメートル西に行った地にある町。

かつて38年前、モーセが荒野のカデシュからカナンの地を探るため、十二人の斥候を送ったことがあった。その時、ヨシュアもそこに含まれていた。やがて戻って来た十二人のうちヨシュアとカレブを除いた十人の否定的な報告をイスラエルが受け入れた結果、彼らは主のさばきによって、ことごとく荒野で倒れる者となったのであった。今、二人の斥候を送り出したヨシュアはどのような思いであったであろうか。送り出された二人は旅行者のような姿をしていったのであろう。彼らはヨルダン川を渡って、夕暮れ時、エリコの町の門を通して中に入った。そしてラハブという名の遊

女の家に入って、そこに泊まった。遊女とは好ましくない職業であるが、当時の環境の中ではこのような方法でしか生きることができなかつたのかもしれない。遊女の家は不特定多数の男たちが出入りするので、町の人々に怪しまれないように、このようなところに入るのはうってつけと判断したのであろう。

[2]「ある人がエリコの王に、『イスラエル人の数名の男たちが今夜、この地を探ろうとして入って来ました』と告げた」

エリコの町の人々の目は節穴ではなかった。入って行った二人の姿を見て、これはイスラエルの斥候だと見抜いて、エリコの王にそのことを告げたのである。

[3]「それで、エリコの王はラハブのところの人に人を遣わして言った。『おまえの家に入った者たちを出せ。その者たちは、この地のすべてを探ろうとしてやって来たのだから。』」

すでにイスラエルの民が近づいて来ていることを聞いて恐れを持っていたエリコの王は、イスラエル人の斥候が侵入して来たと聞いてすぐにラハブの家に人をやって連れ出そうとした。

[4-5] ところがラハブは二人をかくまったのである。彼女は「その人たちは私のところに来ました。でも、どこから来たのか、私は知りません。暗くなって門が閉じられるころ、その人たちは出て行きました。どこへ行ったのか、私は知りません。急いで彼らを追ってごらんなさい。追いつけるかもしれません。」とうそを言った。

[6] 実際は彼女は自分の家の屋上に二人を連れて行き、屋上に並べてあった亜麻の茎の中におおい隠していたのであった。後を見ると分かるが、ラハブの家は城壁の中に建て込まれていて、その家の屋根は平らであり、そこは物置にもなり、夕涼みの場所ともなった。

亜麻はパレスチナ地方では広く栽培されており、高さ120センチメートルほどにもなる植物で、これを水に浸した後、乾燥させて石の上で木槌などで叩いて繊維を取って亜麻布を作る。ラハブはこの亜麻布作りも家計の助けにしていたのであろう。

[7]「追手たちはヨルダン川の道をたどり、渡し場までその人たちを追って行った。門は、彼らを追う追っ手たちが出て行くと、すぐに閉じられた」

ヨルダン川の渡し場までは東に約10キロメートルの道のりである。ラハブはなぜイスラエルの二人の斥候をかくまったのであろうか。その理由は彼女自身が次節以下で話し始める。

[8-9]「二人がまだ寝ないうちに、彼女は屋上の彼らのところへ上がり、彼らに言った。『主がこの地をあなたがたに与えておられること、私たちがあなたがたに対する恐怖に襲われていること、そして、この地の住民がみな、あなたがたのために震えおののいていることを、私は良く知っています。』」

ラハブの家には仕事柄、多くの男たちが出入りしていたので、彼らの口からイスラエルに関する多くのニュースを聞いて詳しく知っていたのであろう。そしてこの地の

住民はみな震えおののいていることも彼女は知っていた。

[10-11]『あなたがたがエジプトから出て来たとき、主があなたがたのために葦の海の水を涸らされたこと、そして、あなたがたが、ヨルダンの川向うにいたアモリ人の二人の王シホンとオグにしたこと、二人を聖絶したことを私たちは聞いたからです。私たちは、それを聞いた時心が萎えて、あなたがたのために、だれも気力を失ってしまいました。あなたがたの神、主は、上は天において、下は地において、神であられるからです。』

イスラエルがエジプトを脱出した時、主が葦の海すなわち紅海の水を分けられて民がそこを渡ったのは四十年前のことであるが、その出来事はもう当時のカナンの住民に伝わっていたのである。そしてつい最近ではヨルダン川の東側のアモリ人の二人の王とその国がイスラエルによって滅ぼされたことも正しく伝わっていた。それを聞いたラハブとその住民は皆、恐れ、心が萎えて気力を失ってしまったのであった。

そしてここでラハブは「あなたがたの神、主は上は天において、下は地において、神であられるからです」と重要な信仰告白をする。彼女はさまざまな偶像の神々を拝むカナンの地において、イスラエルの神、主を信じる者となっていたのである。彼女はこのままでは自分たちがイスラエルによって滅ぼされることを知っていた。そのような状況の中でイスラエルの二人の斥候が何と彼女のところにやって来たのである。それで彼女はイスラエルの側に付こうと決断し、彼らをかくまったのである。

[12-13]『今、主にかけて私に誓ってください。私はあなたがたに誠意を尽くしたのですから、あなたがたもまた、私の父の家に誠意を尽くし、私に確かなしるしを与え、私の父、母、兄弟、姉妹、またこれに属するものをすべて生かして、私たちのいのちを死から救い出す、と誓ってください。』

ここには彼女の家族に対する愛と死と滅びからの救いの思いがよく表されている。彼女の誠意に対して彼らも誠意をもって答えなければならない。それが真の神、主を信じる者のなすべきことである。

[14]「二人は彼女に言った。『私たちはあなたがたに自分のいのちをかけて誓う。あなたがたが私たちのことをだれにも告げないなら、主が私たちにこの地を与えてくださるとき、あなたに誠意と真実を尽くそう。』

「だれにも告げない」こと、これが条件である。この条件で彼らは誓う。「誠意と真実を尽くそう」とはラハブの家の一族を救う、助ける、滅ぼさないという意味である。

[15]「そこで、ラハブは綱で窓から彼らをつり降ろした。彼女の家は城壁に建て込まれていて、彼女はその城壁の中に住んでいた」

城壁はエリコの町の周囲をぐるりと囲んでいたもので、ほかにも同じような家がたくさんあったであろう。そしてこの城壁の中の自分の家の外向きの窓から二人のイスラエルの斥候を綱でつり降ろしたのであった。

[16] 彼女は彼らに追手に出会わないように、ヨルダン川とは反対側の山地の方へ行き、追手が引き返すまで、そこで三日間身を隠して、それから帰るようにとアドバイスをする。実際エリコの町から四、五百メートルほどのところに山地があった。

[17-20] 二人の斥候は彼女と別れる時に彼女の一族のさらに具体的な救出方法を告げる。それは彼らをつり降ろした窓に赤いひもを結び付けておくこと、またラハブの家族や一族全員をラハブの家に集めておくことであった。(17-18) もしイスラエルがエリコの町を攻撃して来た時に、ラハブの家の戸口から出る者がいれば、その責任は本人にある。その人の血はその人自身の頭上に降りかかり、私たちに罪はない。しかし、イスラエル人がラハブの家の中にいる者に手をかけるなら、その血は私たちの頭上に降りかかる。すなわちその手をかけた者が殺されてもかまわない。(19)

さらに14節で言ったことの裏返しであるが、「もし、あなたがたが私たちの、このことをだれかに告げるなら、あなたが私たちに誓わせた、あなたへの誓いから私たちは解かれます」(20)ということも告げた。

[21] これらのことに対してラハブは「おことばどおりにしましょう」と約束し、二人を送り出した。「彼らは去り、彼女は窓に赤いひもを結んだ」これは斥候を送り出した直後というよりもイスラエルの攻撃が近づいた時のことであろう。あまり早くから出しておくとは怪しまれるかもしれない。

[22]「彼らはそこを去って山地の方へ行き、追手たちが引き上げるまで、三日そこにとどまった。追手たちは道中くまなく捜したが、彼らは見つからなかった」それで追手たちはあきらめて帰ったのである。

[23-24]「二人は帰途についた。山地から下り、川を渡り、ヌンの子ヨシュアのところに来て、その身に起こったことをことごとく彼に話した。彼らはヨシュアに言った。『主はあの地をことごとく私たちの手にお与えになりました。確かに、あの地の住民はみな、私たちのゆえに震えおののいています。』」

ヨシュアはこの報告を聞いて感無量であったのではないか。38年前カデシュの地から偵察に送り出された十二人の斥候はヨシュアとカレブを除いて皆、否定的、悲観的なことを言い、当時すでにカナン人たちの心の中にあつた動揺、イスラエルへの恐れを見抜けなかった。その結果としてイスラエルは長い間荒野をさまよひ、二十歳以上の者たちは倒れていかなければならなかったのである。しかし、今この二人の斥候はイスラエルが戦う前からカナン人たちが恐れ動揺していることをはっきり伝えた。これはイスラエルの主なる神がカナン人たちの心を恐れで満たしていることを示すものである。それでヨシュアは、エリコ攻撃の決断に至るのである。

エリコの町のラハブはカナン人でありながらイスラエルの神、主を信じ信仰告白をする者となった。ラハブのところにイスラエルの二人の斥候が入って行ったのも神の摂理であつたであろう。彼女はカナンの地の偶像の神々よりもイスラエルの神、

主を信じ、その証として二人の斥候をかくまい助けた。そのことは後に彼女とその親族全員の救いにつながるのである。

私たちもカナンの地ではないが八百万の神々がひしめくこの日本においてラハブのごとく、真の神、主を信じる恵みを与えられた者である。ラハブは迫りくる滅びの危険の中で、自分とその家族、親族の救いのために迅速に動いた。私たちも家族、親族の救いのために熱心にならなくてもよいであろうか。もちろん他の多くの同胞のためにも救いの福音を伝える必要がある。しかし、今日の箇所から教えられることは、まず自分の身近な人々、家族、親族の救いである。遠い所の人々に福音を伝え、家族、親族に何も伝えていなかったならば、彼らはどうなるであろうか。身近な人ほど福音を伝えるのはむづかしいかもしれない。しかし、使徒16:31の「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」との変わることはないみことばの約束を覚えて、彼らに対して良き証をし、機会をとらえてイエス・キリストの福音を伝える者になりたい。

ラハブが窓に結び付けた赤いひもがラハブの一族を救うことになる。同様に神の御子イエス・キリストが十字架の上で流された赤い血、すなわちイエス・キリストの死による私たちの罪の贖いを信じる者は誰でも罪赦され、救いに入れられるのである。イエス・キリストの血潮がわたしたちの罪をきよめるのである。信仰を持つ者とされた私たちは、心から私たちの身近な人々に福音を伝える者となろう。そしてヨシュアのように、ともにおられる主により頼みつつ、強く、雄々しく、信仰をもって生きていこう。